

# LORO

モノ・マガジン特別編集

都市生活とインテリアのトータル・コーディネート・マガジン

『ロロ』Vol.10

© WPP(禁・無断転載)

カバー写真 藤田一浩 FUJITA Kazuhiro

カバースタイリング 田中美和子 TANAKA Miwako

カバーデザイン 3MIN. GRAPHIC ASSOCIATES



## LORO 目次

6 インTRODククション

8 クリエイターの住まい PartI  
オランダ／デンマーク編

20 [特集]

ソファ特集

ワン ツー スリー

座ってくつろぐ1.2.3

22 ソファのカタチと組み合わせ 24 ひとり掛けソファカタログ 28 ふたり掛けソファカタログ  
32 さんにな掛けソファカタログ 37 張り地、どっちを選ぶ? レザーorファブリック  
38 ソファの選び方注意点 40 張り地カタログ 42 ソファのお手入れ  
43 ソファ・コーディネートプラン 46 ラグマットでこんなに変わる

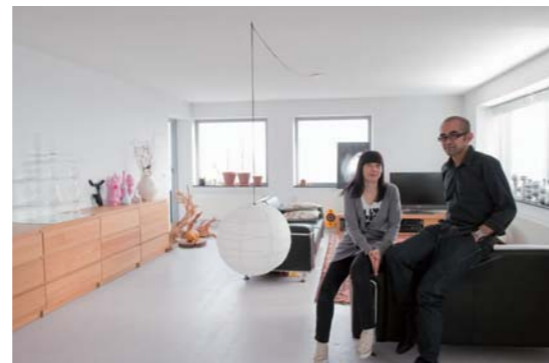
48 デザインから感じるホテルの魅力

54 [特集]

メイドイン・ジャパン ブランド

いま日本製の家具が欲しいリストの上位です

56 カリモク 60 マルニ木工 64 天童木工  
66 リッツウエル 68 ADコア



# LORO

モノ・マガジン特別編集  
都市生活とインテリアのトータル・コーディネート・マガジン  
『ロロ』Vol.10



71 リアル・コーディネーション  
モデルルーム紹介

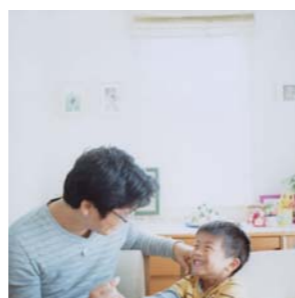
80 クリエイターの住まい PartII  
フランス編



88 デザインニュース

92 デザイナーズ・ウィーク速報

98 インテリア・コーディネーターのお仕事



106 中川正子さんの「ファミリー・フォト・ストーリー」

113 [完全保存版]デザインディクショナリー ～フランス・スペイン編～

118 カッシーナ社名作ソファ「LC2」ストーリー 122 フィリップ・スタルク ワールド  
128 ハイメ・アジヨン クロニクル

130 香りのある生活

132 精油紹介 133 オイルカタログ 134 香りを楽しむテクニック  
136 キャンドルカタログ 138 フレグランス スティックカタログ  
139 インセンスカタログ 140 「香道」の世界



142 問い合わせリスト

143 読者プレゼント

陽の光に包まれて  
穏やかな時が流れる海を臨む家

 デンマーク・眼鏡デザイナー

**Annette Saust Esto**

アネット・セスト・エスト

Photo=小島梨乃 KOJIMA Rino Text=伊藤美玲 ITO Mirei



## 2

## { ふたり掛けソファ・カタログ }



8



7



2



1



10



9



4



3



12



11



6



5

**9 Francfranc「ボルケソファ」**

ソファ初心者にも買いやすい、お値ごろソファ。アームが低く、寝転んで枕代わりに使ったり、足をのせたりと自由自在。丸みの多いフォルムなので、体にフィットしお座布団感覚で使えるかも。優しいベージュの他、イエローもあり。6万8000円◎Francfranc

**8 リーン・ロゼ「コンフルアンスふたり掛けソファ」**

ひとり掛けをパズル感覚で組み合わせたような、ふたり掛け。まるで片方のソファが寄り添っているような、デザインはリビングを柔らかな雰囲気。シックな色合いがそろうカラーコンビネーションなど自由に色が組み合わせられる。29万9250円◎リーン・ロゼ東京

**7 TIME & STYLE「トリエステ」**

スクエアなフォルムの端正なソファ。厚いアームや背、座の角部の、しっかりとしたステッチに注目。これは技術あるメーカーだからこそできるデザインだ。部屋をすっきりと見せてくれそう。19万6350円◎TIME & STYLE MIDTOWN

**3 TIME & STYLE「エドワード」**

どこかクラシックなソファを思わせる、背からアームへのボリュームある曲線が特徴の絶妙なサイズ感だ。豊かさを感ぜさせながらも、圧迫感がないので、ひとり暮らし大人女子のお部屋にもおすすめ。21万9450円◎TIME & STYLE MIDTOWN

**2 カンディハウス「ウイング ラックス」**

シャープな脚部にふっくらとソファをのせたように見えるデザイン。座の下が抜けることで、視線が抜け、圧迫感がない。ホコリがたまりやすいソファの下、掃除がしやすい点も◎。国産家具の名産地、北海道旭川の製品。33万1800円◎カンディハウス

**1 フレデリシア「スポークバックソファ」**

日本人好みともいえるコンパクトかつ多機能ソファ。サイド部が革ひもで開閉し、一方のコーナーにもたれて足をのぼし、寝椅子にすることができる。巨匠ボーエ・モーエンセンによるデンマークの名作デザイン。81万7950円◎フレデリシアファニチャー

**12 デ・パトヴァ「ピロー」**

ふっくらとして清潔感のあるソファ。コットンのキャンバス地でグースのダウンをくるんでいるので、ざっくりふっくらからのダブルの感触。商品名の通り、枕のようでお昼寝仕様？デザインはかのヴィコ・マジストレッティ。78万9600円◎カッシーナ・イクスシー青山本店

**11 リーン・ロゼ「トーゴ ふたり掛けソファ」**

中央を縫い締めたようなフォルムが独創的なソファ。「蜂の腹部」から着想を得たという、意外なエピソードをもつ。包み込むような座り心地が、日本でも大人気だ。発売から35年以上というロングセラー。キルト式カバー。15万7000円◎リーン・ロゼ東京

**10 フリッツ・ハンセン「アルファベット」**

文字を並べて無限に文章が生まれるように、ソファの組み合わせも自由に。そんな着想から生まれたのがこちらの逸品。正方形に近い2種類のシート、好きな色を選ぶだけで、サイズと形が無限に組み合わせ可能だ。57万2250円◎フリッツ・ハンセン

**6 BALS TOKYO「MESH」**

白くキュービカルなフォルムは、シンプルなインテリアにぴったり。座面が床に近く、背もアームも低めなので、お部屋を広く見せてくれる効果もあり。圧迫感なくシャープな印象を演出するのならこれ！ ブラックもあり。45万2000円◎BALS TOKYO

**5 トーネット「S3502」**

ソファというより、多目的チェアとも言えそうなのがこちら。シートが41cm、手前にスライドして、フットレストにすることができる。幅は1m40cmと狭めだが、座が奥方向に延びることで、省スペース＆機能的に使える。87万4650円～103万8450円◎アイデック

**4 フクラ「アレーナ 2Pタイプ」**

正統派ソファとも言えるのがこちらの商品。布張りは裾を巻き込んだものと、スカートのようにフレアのついたものがあり、それぞれ違う印象が魅力だ。幅はコンパクトながら、細めのアームなので座面はゆったりとした印象に。28万1400円◎日本フクラ

# 3 さんにん掛け(…and more)ソファ

ゆったりとソファの心地よさを満喫したいなら、3人掛けもしくはそれ以上のサイズを選びましょう。横になってもよし、オットマンを併用してリラックスするもよし。

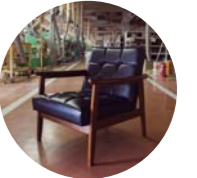


ティーボット4万2000円、クリーマー1万2600円ともにH.P.DECO、ロールのナプキン2940円、スプーン1155円、マグカップ945円以上すべてザ・コンランショップ、アンティークのココット1万2800円JANTIQUES、箱私物

ソファ47万2500円@hike、スタンドライト13万6500円、石畳柄のラグ1万9845円、クッションカバー9975円以上すべてH.P.DECO、録カバーにしたファブリックのコンテナ1万9950円@ルック、フティック事業部/マリメッコ、アンティークのN.Y.Timesの本各1万5000円@バス、ザバトン表参道、本の上のライト4万6200円、ソファの上のスプレーボトル1680円ともにザ・コンランショップ、ロングワンピース1万3650円@ルック、フティック事業部/マリメッコ、タイト私物

いま日本製の家具が  
欲しいリストの上位です

## A. カリモク



創業は1940年(昭和15年)。終戦から2年経った昭和22年に株式化し、主に紡績機の木部品を製造していた。高度な木工技術を要するミシンのテーブルなども手がけ、やがて輸出用家具の部品製造を経て自社製品として国産家具の生産・販売を開始。1962年、カリモクが最初に発表した椅子が「Kチェア」であり、いまも同社の主力商品としてその名を知られています。そんな国内トップブランドのモノ作りを、三井デザインテック・ディレクターの見月伸一さんと一緒に覗いてみました。

**見月** 木工作业が中心なのに、すくきれいな工場で驚きました**加藤** ありがとうございます。先代社長が「モノ作りはきれいな場所でない」といってモノが出来ない」という考え方でしたので、この工場規模にしてはオーバースペックなくらい強力な集塵装置を設置しています。もちろん、各部署ごとの掃除も徹底していますね。まあ、わが社の伝統みたいなものです(笑)

## いいモノはきれいな場所じゃないと生まれない! 日本で一番掃除の行き届いた、 クリーンな工場から生まれるカリモクの家具

のブランドとしての家具作り、その長所はどこに重きを置いていらっしゃいますか?  
**加藤** まずは安全な作りを心がけています。安心して使ってもらえる家具であることを第一に考えています。たとえばサイズは、やはり大型の洋家具と比べてカリモクの家具はコンパクトなものが多い。「見映えがしない」なんて声もありますが、それはわれわれ日本人の体格や住空間を考えた上での形なのです。実際使ってみて、「使いやすい」と思っていただけの商品作りを目指しています。

**見月** とはいえ日本人の体形や都市型の住空間、特にデジタル化された生活スタイルの変化は、ここ数年で劇的に変わっていると思うのですが。  
**加藤** はい。たとえば自動車のシート・メーカーや大学の研究機関など、異業種のデータを元に、長時間のホームシアターの観賞でも疲れない椅子の形、日本人にとって座り心地のいい椅子の形など、共同研究して製品化したモノは、やはり販売の数字も伸びているようです。やはり

「日本人のサイズ感」をきちんと考えたモノ作りが、日本の家具ブランドとしてやるべきことなんじゃないかな。

**見月** いまカリモクとして一番注目されている素材は何ですか?

**加藤** 木はやっぱり日本の木ですね。杉とかヒノキといった人工林ではなく、桜や楓という、いまはほとんどが紙パルプ原料のチップとなつていますが、そういった材料をきちんと活かせられないか考えています。また、われわれがそういう取り組みをすることで、少しでも林業を生業としている地域の活性化に繋がればいいなと思っています。あと張地に関しては、これは日本のハイテク繊維に大きな期待を寄せています。やはりメイド・イン・ジャパンを標榜する以上、家具に使う繊維はできれば国産にして付加価値を高めたいです。その中でもハイテク繊維に注目です。実際「カリモクJP」というシリーズには、旭化成のフュージョンというハイテク繊維を使っています。純国産のアイデンティティを求める方向性として

では、あきらかなと思っています。**見月** デザイナーは何人くらいいらっしゃいますか?  
**加藤** インハウスで25人くらいいます。基本的にはずっと、すべての製品はインハウスで手がける方向でやってきたのですが、内部のやり方にどっぷり染まったり、足元が見えてこなかったりすることもあって、去年スタートした「カリモク・ニュースタンダード」では外部のデザイナーにも参加してもらいました。

**見月** メイド・イン・ジャパンの素材や作りがこだわって行く中で、あえて海外のデザイナーを起用したり、海外の見本市へ出て行くことの戦略的な意味は?

**加藤** ひとつは、カリモク・ニュースタンダードというのは、柳原照弘君という社外デザイナーに全体のディレクションを依頼したのですが、彼と私の間でブランドの方向性を考えながらデザイナーをピックアップし、一方で、今後のカリモクのありかとしてオープンなスタンスを取ろうという方向性で進んでいるのです。これまでは、デザイン開発から生産からすべて前段でやってきたスタイルに固執することなく、カリモクとして意味があるなら外部の意見も受け入れようという考え方ですね。もちろん、すべてを自社で賄うこれまでのスタイルを一方では守っていきな



がらの話ではありますが、われわれが本来持っている長所やユニークさを引き出してもらいながら、時代に即した新しいカリモクの方向性をクリエイトしているのです。海外の見本市出展に関しては、たとえばミラノサローネなどはサッカールのワールドカップみたいなもので、どれだけブランドとしてのアイデンティティが伝えられるかが勝負なわけです。逆に自分たち自身のアイデンティティが明確でないとは出来ないうわけで、そういう意味では、外への発信と自己の再構築を世界レベルで同時に行っているわけで、意義深いチャレンジだと思っています。

**見月** いまの多岐にわたる商品構成に共通項はありますか?

**加藤** たとえば「ドマーニ」と「カリモク」の関係は、トヨタ自動車の「レクサス」と「トヨタ」の関係みたいなものです。ドマーニは求められる品格やレベルが高いので、販売するスタイルも専門のショールームで行っています。一方「カリモク」というブランドは、カントリースタイルからコンテンポラリー系、ベシック系など多様な世界観を持っており、コーポレートのブランドとしての安心感はあると思います。同じ「カリモク」の名を冠しているも「カリモクJP」や「カリモクニュースタンダード」は、「カリ

モク」以上にメッセージ性が強いので、そこは他と切り離して考えていますね。でも、すべてに共通するのは「安全・安心」であること。「暮らしの中の道具としての使いやすさ、使い勝手の良さ」が第一なんです。デザインはそれを満たした上で、という考え方はですね。いかにユニークで芸術性の高いデザインでも、使い勝手が良くないのは目指す方向ではありません。

**見月** 最後に木工を生業とする企業としての環境問題へのスタンスは?

**加藤** カリモク60とかニュースタンダードを買ってくださる若い世代のお客さんは「地球環境」を教育として受けた最初の世代です。カリモクニュースタンダードでは、家具としては未利用の国産の広葉樹林を使っているのですが、そこに対しての質問が結構、その世代から出てきたりするんです。「未利用の木とは一体どういう意味ですか?」。

その他にも、80年代からやっていますが、マレーシアのゴムの木の再利用を積極的に進めています。成長し過ぎてゴムの樹液が出なくなつた木というのは、それまで焼却処分されていたのですが、それを何とか家具の材料に出来ないかと研究を重ね、いまでは多くの製品にこの素材を使っています。

## Japan Made, Japan Brand



三井デザインテック  
クリエイティブ・ディレクター  
見月伸一さん

三井デザインテックにおいて、インテリアに関わるデザイン・ディレクション、コンセプトワークを中心に活躍する。豊富なリサーチとデータ、洞察力に基づくデザイン・セミナーは高い評価を得ている。



カリモク(株)  
取締役副社長  
加藤 洋さん

ソフトな語り口で取材に応じていただいた副社長は、創業者加藤正平の孫。カリモクニュースタンダードを始めとする新しいコンセプトを推進するリーダー。従来の家具用材以外の新しい素材の開発にも積極的。



決して大きさではなく、本当に「チリひとつ落ちていない」工場内の通路。整然と進んでいくラインで、高品質の製品が生産されていく。昔からの工業地帯であり、同時に職人が少ない地域なので、ハイテック&ハイタッチなモノ作りの理念が育っているという。言われてみれば、機械と人の手の作業分担が絶妙。ちなみに集塵機で集められた工場内の木屑は、すべて集中してボイラーに送られ、燃料としてリサイクル。





3



TORII / 【KARIMOKU NEW STANDARD】  
日本の伝統的な形、古代からのデザイン・アイコンである鳥居をモチーフとした椅子。ポイントは存在感のある背もたれや、まっすぐ伸びた脚部にあり、その木工部分の丁寧な仕上げや、座面の質感など、さすがと唸らせる出来ばえ。使用されている木材はイタヤカエデ。生産量が一定でなく、効率重視の家具産業の視界には入ってなかった素材を、積極的に用いている。4万7100円(本革張り/黒)



4

REN / 【KARIMOKU NEW STANDARD】  
日本人は本来、畳に座った佇まいの美しさを持っている民族であった。“座る”という所作を美しく見せるために、カリモクはこの「REN」で背もたれの高さを意図的に低くして、自然と背筋が伸びるデザインを完成させた。くつろぎの中でも適度な緊張感を持ち続ける、日本の美意識を表現した椅子である。洋家具のチェアに、メイド・イン・ジャパンのアイデンティティが主張する。素材はイタヤカエデ。7万8800円



5

肘掛椅子 US2350B250 / 【KARIMOKU】  
クラシックなデザイン、昭和30～40年代にタイムスリップしたような懐かしさの一人掛けソファ。だが、そのフォルムをよく観察すると非常にオリジナリティに溢れている。オブジェにもなりそうな独特の形は、近代的なインテリアの室内でいいアクセントになりそう。平織布地の張地も懐かしい色合い。同デザインの2人掛けソファもチェックしたい。省スペースな設計は、日本の住宅サイズにフィットする。8万1900円



1

Kチェア(1シーター) / 【カリモク60】  
1962年に前身の刈谷木材が初めて手がけた洋風家具のファーストモデル。ノスタルジックな味わいと、クラシックモダンの存在感。深い座面は安心感のある座り心地。永遠の定番と呼べる“ニッポンの椅子”である。3万2550円  
<http://www.karimoku.co.jp/>

クリーンな工場内で商品撮影しちゃいました!  
カリモクのちょっとステキなチェアたち。

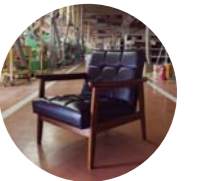


2

肘付食堂椅子 CE7030BR / 【KARIMOKU】  
きめ細かな模様で工芸品などに使われる希少な材料、花梨(カリン)を使った美しい佇まいの椅子。インハウスデザイナー、永田氏のデザインであり「日本の木の椅子～明治から近代・現代までの108脚 / 別冊商店建築(78)」に選ばれた一脚。シート張地の交換が可能なカバー方式を採用。8万6100円

いま日本製の家具が  
欲しいリストの上位です

## A. カリモク

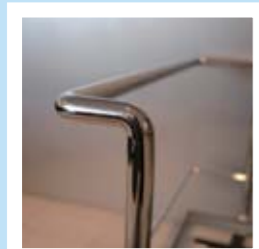


Photo=Tomooki Tsuruda (WPP)

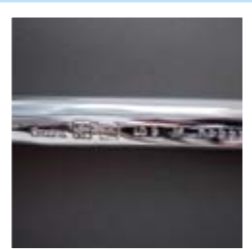


進化するグランコンフォール。  
カッシーナ社の「LC2」は、  
1928年モデルとここが違う

# LC2



あたかも1本のスチールパイプを曲げたように見えるが、実際は溶接で繋いでいる。これだけクロームメッキを輝かせるには、パイプの表面を丹念に磨く必要があるという。



左側のフレームの裏に、カッシーナ社と巨匠シリーズの複製品であることを示す刻印、シリアルナンバー、デザインした3人を代表してル・コルビュジエの名前が掘り込まれている。



当初は一人掛けだったが、複製時には複数人が座れるモデルが誕生している。



当初は金属のコイルで作られた底面の支えも、良好な座り心地と耐久性を上げるため、戦後に発明されたエラストックベルトと呼ばれるゴムバンドに変更されている。



型崩れしないよう、'64年の複製では詰物とポリエステルに変えられたクッションの中身も、2010年からオリジナルである羽毛だけの詰物も選択可能になった。



28年のモデルは後脚が短く少し上を向く形状だった。現在のモデルは前後の高さが揃い、ル・コルビュジエのサヴォイ邸のピロティのように、建築との関わりをより感じさせる。



## グランコンフォール Grand Comfort LC2ストーリー

文・写真/ジョー・スズキ JOE Suzuki

デザインしたのはこの3人  
シャルロット・ペリアン(右)  
ピエール・ジャンヌレ(中)  
ル・コルビュジエ(左)

デザインしたル・コルビュジエ(Le Corbusier)のイニシャルであるLCに、番号を付けて呼ばれている「LC2」。まぎれもなく20世紀を代表する名作家具だ。この椅子の誕生に、彼の事務所のピエール・ジャンヌレとシャルロット・ペリアン、ふたりのスタッフが大きな役割を果たしたのは有名な話である。ただしふたりの成果をル・コルビュジエが横取りして、自分の名前を付けたというのは大きな誤解だ。様々なアドバースを与えたうえに、身長160cmと小柄なジャンヌレとペリアンが作るデザイン案を、窮屈だからなかった逸話が残っている。

### 発表時は売れなかった

LC2は「グランコンフォール」名で1928年にデザインされ、翌年に大型のLC3とLC1、そしてLC4と一緒に発表された。現在は、LC2は座のクッションが二段、LC3は一段のものを指す)ドイツで最初にスチールパイプの椅子が登場した1925年から間もない時期、パリに家具作りに相応しい金属工房がある訳がなく、ペリアンは錠前屋に依頼してスチールフレームを作成。ラッカー塗装を施した。ラバーフォームが発明される以前のため、クッションの中には羽毛が入れられていた。しかも羽毛の偏りをできるだけ避けるため、タペストリー織の職人が伝統技術を使って仕上げていた。

こうして誕生したLC2も、発表当時は人気がなくて売れず、数点が作られただけだったという。一般的な人々にとって、家具は木で作るものであり、最新の素材であるスチールパイプの椅子を買うのは、一部のインテリだけだったのだ。さらに世界恐慌が追い打ちをかけた。

### ペリアン監修で複製

ところが戦後になると、多くの家具に金属が使われるようになり人々の意識も変わる。LC2のデザインも人気となり、古い写真を元に作成されたコピー商品が巷に多く出回るようになったのだ。そこで1964年、ル・コルビュジエは、28年にデザインされた家具を、イタリアのカッシーナ社に依頼し製品化を行うことにした。質の高い最先端の家具で知られる同社に比べ、当時のフランスには信頼できる家具メーカーがなかったのだ。もっともこの作業中にル・コルビュジエは亡くなってしまいが、ペリアンが監修して複製にこぎ着けた。このような経緯から、現在ル・コルビュジエ財団が認めている家具は、カッシーナ社製のものだけになっている。



'64年の複製で「LC2=黒革+クロームメッキ」のイメージが定着したが、'28年のオリジナルは、金属に塗装を施したものにキャメル革を組み合わせたもの。実は当時の色である7色のフレームも複製されている。組み合わせる張地の色で、雰囲気は大きく異なる。42万円～



# 香りのある 生活

香りは空間に豊かな表情を付け加えてくれます。  
一つひとつの香りの特性や、その活用法、楽しみ方を知れば、  
いつもの空間がより深くリラックスできる場所へと変化します。  
そっと、香りの小瓶の蓋を開いてみることにしましょう。

Photo=熊谷義久KUMAGAI Yoshihisa (WPP) P130-131,140-141  
青木健格AOKI Takenori (WPP) P133,136~139  
Text=吉田溪 YOSHIDA Kei (P132)、菅聖子 SUGA Seiko (P140-141)、  
口口編集部Loro Magazine





# LORO

WORLD MOOK  
ワールド・ムック848

**Publisher**

発行人 / 今井今朝春  
IMAI Kesaharu

**Editor in Chief**

編集人 / 土居輝彦  
DOI Teruhiko

**Editors**

松崎薫子  
MATSUZAKI Kaoruko

徳本真弓

TOKUMOTO Mayumi

**Advertising Director**

坪井一雄  
TSUBOI Kazuo

松本博幸

MATSUMOTO Hiroyuki

**Production Director**

小川俊介  
OGAWA Shunsuke

**Circulation Manager**

笹川裕史  
SASAGAWA Hiroshi

**Design**

スリーミン・グラフィック・アソシエイツ  
3MIN. GRAPHIC ASSOCIATES

**Print**

大日本印刷株式会社  
DAI NIPPON PRINTING Co., Ltd.

**Type Setting**

有限会社ベース  
BASE

**Correspondents, Washington, D.C. Breau**

(Pictorial Press International)  
Norman T.Hatch  
Mikako Burks

**Collaboration with**

三井デザインテック  
MITSUI Designtec

玉留勇輝

TAMARU Yuki

見月伸一

MITSUKI Shinichi

菅原英二

SUGAWARA Eiji

高梨未果

TAKANASHI Mika

柴沼伸子

SHIBANUMA Nobuko

清原威巳

KIYOHARA Takemi

一都内のある博物館の一室にコルビュジエのLC2ソファが一脚、古い標本棚の間に配置されています。そこはゆったりとした休日を通すための秘密の特等席。ほとんど客入のない展示室はいつもひっそりと静まり返っていて、外光が古ガラスの窓から差し込み、天井高のある空間に柔らかな光を照らします。その場所に一冊の本を持って行き、日が暮れるまでの間を過ごすことは私の楽しみのひとつ。本にのめり込んでいる頭と、いつの間にかソファに溶け込んでいた体に、壁掛け時計が戻ってこいよ、といわんばかりに1時間ずつポーンと静かに鐘を鳴らします。私の大好きな座ってくつろげる場所は、そんな空間に溶け込ませてくれる一脚のソファがある場所です。(編集下)

発行所  
株式会社ワールドフォトプレス  
〒164-8551 東京都中野区中野3-39-2  
(編集部) TEL. 03-5385-5666 FAX. 03-5385-5617  
(販売部) TEL. 03-5835-5701 FAX. 03-5385.5703  
(広告営業部) TEL. 03-5385-1350 FAX. 03-5385.1348  
本誌の無断転載を禁じます。  
© WORLD PHOTO PRESS 2010